（第３種郵便物認可）　大分合同新聞

施設や里親から巣立った人支援

大分市中心部に交流拠点

当事者３人「気軽に相談を」

児童養護施設や里親家庭を巣立った人たちを支援しようと、NPO法人おおいた子ども支援ネット（大分市）が交流拠点「CONET STATION（コネットステーション）」を大分市中心部に開設、20代の当事者3人がスタッフとして応対している。当事者が相談に携わるのは全国的にも珍しく、3人は「ここに仲間がいる。困り事があれば気軽に相談を」と呼びかけている。

社会的養護から離れた人は「ケアリーバー」と呼ばれ、身近に頼れる人がおらず孤独や生活苦を抱えるケースが多い。厚生労働省が初めて実施した実態調査（2021年公表）では、当事者2980人の33・6％が「生活費や学費で困っている」と回答。施設職員や里親家庭との直接の交流が「年に1回もない」は31・1％だった。

ケアリーバーの相談に応じている（左から）川村涼太郎さん、後藤拓也さん、内田理美さん

交流拠点は昨年春、ビルの一室を改装してオープン。いずれも大分市内に住む川村涼太郎さん(27)、内田理美さん(24)、後藤拓也さん(24)が当事者目線で運営に当っている。

3人は訪れた人の話に熱心に耳を傾け、一緒にイベントを楽しんだり、引っ越しを手伝ったりしている。

これまでの利用者は60人ほど。川村さんは「一般家庭のしきたりが分からない、身元保証人がいないなどケアリーバーならではの困り事の多さを実感している」、内田さんは「初詣に一緒に行き、私も夢をかなえられた」、後藤さんは「施設で育った過去をネガティブに捉え、人との関わりを恐れるケアリーバーもいる。つながることで前向きになってほしい」と話す。

活動の様子は交流サイト（SNS）で情報発信。その他、子どもの虐待防止を呼びかける「オレンジリボン運動」にも参加。児童養護施設を訪れ、社会に出て必要なスキルを教える活動にも取り組んでいる。

3人は「いろんな活動を通じて、一人でも多くのケアリーバーが、笑顔で生きられるよう手伝っていきたい」と張り切っている。

交流拠点は毎週火、金曜の午後1～6時と、第2、4土曜の午前10時～午後6時にオープン。問い合わせはNPO法人おおいた子ども支援ネット事務局（097・574・6108）へ。

（永冨希望）

©大分合同新聞　無断複製転載を禁じます。